View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

1

［報告｜report］

ルチアナ・デュランチ教授をお迎えして

Dチームよりの報告

Professor Luciana Duranti at GCAS: A Report from "D-team"

平野泉＋橋本陽＋松尾美里

Izumi Hirano, Yo Hashimoto and Misato Matsuo

2012年6月18日－7月1日の2週間、ブリティッシュ・コロンビア大学のルチアナ・デュランチ教授（以下、デュランチ先生）が学習院大学に特別研究員として滞在された。これに先立ち、2012年4月の最初の演習の日に、4名の学生（阿久津美紀［M2］・橋本陽［D2］・平野泉［D3］・松尾美里［D3］、以下学生は敬称略）が海外研究者の滞在にまつわる実務を学生側からサポートする担当（以下、Dチーム）として指名された。それ以降、Dチームを中心とした本専攻の学生が多様な形で、先生方・専攻事務室のご指示のもと、そしてある時には先生方・専攻事務室の意図するところを少々逸脱もしながら、デュランチ先生来日というイベントに関与することになる。2008年の専攻開設以来、私たち学生は毎年、先生方のご尽力により、東京にいながらにして世界的なアーキビストのお話を直接に伺う機会に恵まれてきた。しかしそうした外国からのお客様の対応に、準備段階から学生がこれほど関わったのは、今回が初めてだったように思う。

本報告は、この3ヶ月間に学生たちが経験したことを一部なりとも記録化することで、その成果と問題点を検討し、今後の専攻における同様の活動に活かすためのものである。ふりかえってみると、とくにデュランチ先生滞在中の2週間については、誰もが次々と展開する事態に対応することに終始したというのが現実で、学生の活動の「全体」を把握していた者はいなかった。つまり本稿はあくまで、「少なくともDチームの活動の全体がある程度見えるような報告」という限定付きのものである。それすら可能かどうかは疑問ではあるが、とりあえず全体を大きく3部に分け、まずはDチーム活動の概要（平野泉）、そして4回にわたり実施された学生主催の事前勉強会について（橋本陽）、最後に、今回の対応の問題点と今後の課題（松尾美里）の順に報告することとしたい。

1 ── Dチーム活動の概要（平野泉）

1-1：特別講義に備えて勉強しつつ待つ［4月中旬－5月後半］

Dチームメンバーが指名された日の夕方、橋本・平野の間で、事前勉強会を自主開催してはどうかという話が交わされた。前期演習の日程がかなりタイトな状況であるうえに、6月に入ると修論中間発表を控えてM2が勉強会に参加しにくくなること、そして超多忙なデュランチ先生から必読文献などのご連絡がある頃には、勉強会のための時間を確保できなくなってしまうのではないかと危惧されたからであった。2009年のエリック・ケテラール先生来日時のような公式の勉強会

が行われなかったのは残念でもあったが、4月中旬からの時間を無駄にせず事前勉強に充てられたのは、時間配分としてはよかったのではないかと思う。

1-2：まだまだ白いスケジュール表を眺めつつ待つ［5月後半－来日前日］

5月後半になり、来日中の公式な行事の日程がある程度固まってきた25日に打ち合わせを行ったが、細かなスケジュールは空欄のままで、何を準備したらよいのか、また来日後何をすればいいのかは見えないままであった。しかし2008年招聘のデイヴィッド・D・グレイシー先生のときも、2009年のケテラール先生のときも、「明日どうしよう?」という場面で動ける人が動くしかなかったため、終わってみると少数の人しか関われなかったという経験を、橋本・平野・松尾は共有していた。そのため、早めに個々の学生が動ける日・時間を聴取して「デュランチ先生対応シフト」を決めておいてはどうかと学生から提案し、先生方のご賛同を得て実施した。また、懇親会等の日程と手配、出欠確認等もこの時期にある程度進めた。そして6月13日、安藤先生のご指示で学生（平野）とデュランチ先生がメールをやりとりすることになり、その後このチャンネルでのコミュニケーションも活発化する。

1-3：あっという間の2週間［6月18日－7月1日］

［1-3-1：日々の対応］

6月18日、いよいよデュランチ先生と息子さんのジョルジオさんが来日された。当日の成田空港へのお迎え（蓮沼素子［D1］・平野）以降、「デュランチ先生対応シフト」をいちおうの目安に、学生がそれぞれに対応した。この時点でも、お二人が日本で具体的に何をしたいのかは明確ではなかった。とはいえ、ジョルジオさんはどんどん一人で町歩きを楽しめる方であり、さらに19日の専攻主催の歓迎会でデュランチ先生が「予定がないのが良い予定」とコメントされたと伝えられたこともあって、「あまり細かく干渉しないのがよかろう」という方針に傾いた。20日の谷中観光に同行した近藤伊織［M1］・橋本の2名で浅草（26日）・鎌倉（28日）観光を含む日程の大枠を決定、あとは自由に行動してもらうことになった。この時点で、シフトに入っているからといって必ずしも待機や対応は必要ではないことが明らかになったため、学生は活動内容を当日中に本専攻のメーリングリストであるGCASML（以下、ML）に報告するとともに、翌日シフトに入っている学生が何らかの対応をする必要があるか、あるとしたら何をすべ

Duranti教授来日日程［2012年6月18日－7月1日］

6/18（月）	来日（出迎え：蓮沼・平野）
6/19（火）	初登校、専攻教員とのミーティング（於：専攻共同研究室） 専攻主催歓迎会（於：割烹大倉）
6/20（水）	谷中観光（担当：近藤・橋本）
6/21（木）	終日フリー
6/22（金）	京都へ（安藤先生同行）、東寺・京都府立総合資料館訪問
6/23（土）	京都大学大学文書館訪問 京都大学大学文書館との共催・国際セミナー 「デジタル記録とアーカイブズ」 講演「デジタル記録の信頼性に向けて―― インターパレスプロジェクトの成果」 （14:30-16:30、於：京都大学芝蘭会館別館） 懇親会（於：楽友会館）
6/24（日）	帰京
6/25（月）	特別講義“The InterPARES Project and Beyond” （18:00-19:30、於：西2・503） 学生主催懇親会（於：一番星）
6/26（火）	浅草観光（担当：阿久津）
6/27（水）	学生面談（平野・松尾）
6/28（木）	鎌倉観光（安藤先生同行、担当:阿久津・雫石・橋本）
6/29（金）	学生面談（蓑口・元・齋藤柳子・橋本）
6/30（土）	講演会“Archival Diplomatics and Digital Records.” （15:30-17:00、於：中央405） 学生主催歓送会（於：マックス・キャロット）
7/1（日）	離日（見送り：橋本・平野）

きかを確実に連絡・申し送りすることにした。こうしたMLでのやりとりは、4月の時点で先生方のご了承を得て行ったものではあったが、少々利用の仕方に不適切な点もあったかもしれないと反省している。その一方で、京都で先生のアテンドをする予定の渡邉佳子[D3]が、東京での先生の様子を把握できたり、諸事情により具体的活動に関われない学生とも情報が共有できたり、というMLならではのメリットもあったように思う。

[1-3-2：ファイル等の配信]

講演のPPTファイル（英文）、京都講演のための日本語版PPTファイルなどは、安藤先生が受信次第Dチームに送って下さった。しかしPPTファイルのサイズが大きく、平野がPDF変換し、圧縮・サイズダウンしてMLに配信しようとしたところ、配信可能なファイルサイズの上限を超えてしまうものが複数あった。そのため、齋藤柳子[D1]ほか複数の学生を学年ごとの配信元とし、希望者のみファイル送信する形をとった。元ナミ[D1]から「ある講義で使用しているファイル共有の仕組みを利用しては?」という提案も出たが、講義用の仕組みを流用するのはためらわれたため、今回は分割配信方式で乗り切った。とはいえ学生間でサイズの大きいファイルを共有するためのプラットフォームについては、今後の検討が必要と考える。

[1-3-3：学生個人指導]

19日、デュランチ先生が学生の個人指導をしてくださるというお知らせが安藤先生よりMLに配信され、その日程調整をDチームが行うことになった。しかしMLに希望者が殺到するというような状況にはならず、どこか学生が尻込みしているような雰囲気があった。そこで23日、ゼミなどで聞いてみると「やってみたい」という人が複数いたので、その場で日程を調整してデュランチ先生とともに京都に滞在中の安藤先生に連絡した。その後デュランチ先生からも面談前の準備について「研究のテーマ、概要と文献リストを事前に送るように」との要請があり、学生の緊張は高まった。最終的に6名（蓑口愉花[M1]、元ナミ、齋藤柳子、橋本、平野、松尾）が27日、29日に指導を受け、それぞれ貴重な助言を得た。

[1-3-4：懇親会等準備・開催]

25日の学生主催懇親会はDチームの阿久津、30日の歓送会の会場手配は保坂先生、司会・受付等の詳細については専攻事務室、ゼミ幹事（近藤伊織・久保田明子[D1]）、そしてDチームが担当した。25日の懇親会（会場：一番星）は主として学生と修了生、30日の歓送会（会場：マックス・キャロット）は先生方のほか講義の出席者も数名参加され、盛況のうちに終わった。ただどの会場も一度着席すると動きにくいテーブル配置であったため、デュランチ先生とお話しできなかった参加者も多かったのではないか。その点が反省点である。

1-4：反省点

今回の取り組み全体についての反省と課題は、結びの松尾担当分に譲るとして、活動の全体が「調整」なき「協力」に陥る危険性をつねにはらんでいた、ということだけは個人的な反省点として挙げておきたい。専攻教員、そして専攻事務室とDチームとの関係があいまいなまま、学外での活動（その内容もあいまいであった）に学生が参加することで、専攻と個々の学生は一定のリスクを負うことになった。そうしたリスクが具体化しなかったことは、各担当者がそれぞれの場面でそれぞれに的確な判断をしたことの賜物でもあり、経験豊かな人が集う本専攻の「底力」の現れであったかもしれない。とはいえ、やはり今後は変えていかなければならないだろう。

また、Dチーム内部で「デュランチ先生来日という一大プロジェクトを、完全な形でアーカイブする」などのアイディアもいくつか生まれたものの、結局は実現できないまま終わってしまった。社会人学生が多く、しかも学ばねばならないことが多い本専攻では難しいかも知れないが、こうしたイベントを単なるイベントに終わらせず、参加型のひとつのプロジェクトとして結晶させることができれば、学生にとって大きな学びの機会になるだろうと思う。

2 ―― 事前勉強会について（橋本陽）

前項で述べたように、ここからはデュランチ先生が本専攻のために準備してくださった2回の講義に向けて、学生が自主的に開いた事前勉強会について、その内容を簡単に記述する。この事前勉強会は5月から6月の間に4回開かれた。事前勉強会を準備する段階においてはデュランチ先生の講義内容が本専攻に伝達されていなかったため、Dチームは先生の研究業績から予習しておくべき内容を推測し、勉強会のカリキュラムを作成した。その柱は二つ、ディプロマティクスとインターパレスプロジェクトであった。この予測はそれほど外れたものではなかった。というのも、先生の講義の主

題は、1回目が 'The InterPARES Project And Beyond'（6月25日）、2回目が 'Archival Diplomatics and Digital Records'（6月30日）であり、どちらの講義も事前勉強会の主眼として掲げられた項目に合致するものであったからである。

事前勉強会は、それぞれ発表者が事前に参考文献を挙げておき、当日はそれをまとめたレジュメを配布し、報告終了後に参加者たちが討議するという形式がとられた。以下、事前勉強会のそれぞれの内容について簡単に言及する。

第1回目の勉強会は5月12日に行われた。テーマは「デュランチ先生とディプロマティクス」であり、橋本が報告した。勉強会の狙いは、ディプロマティクスの定義と歴史について知識を得ることにあった。主となる参考文献は二つあり、一つはデュランチ先生が*Archivaria*に寄稿しディプロマティクスを体系的に初めて北米に紹介した一連の論考 'Diplomatics: New Uses for an Old Science' であった[1]。もう一つはデュランチ先生に師事したヘザー・マクニールの著作*Trusting Records: Legal, Historical, and Diplomatic Perspectives*である[2]。前者は、ディプロマティクスの概要とそれによる文書の分析方法はどのようなものであるかを述べる。また、後者は、ディプロマティクスの誕生の歴史、その近代に至る発展の経緯、そしてディプロマティクスの電子記録への応用など、この学術分野の来し方行く末について大観的に描いたものである。勉強会参加者は、ディプロマティクスのもつ可能性の二面性、すなわち既存の文書の真正性を検証すると同時にこれから作成される文書に真正性を付与するための文書様式の作成に寄与する機能があることを知った。橋本報告では、前者の機能について論議したが、この知識をもとに、松尾報告において後者の側面を議論することとなった。

5月19日に開かれた第2回の勉強会は、齋藤柳子が報告者であった。斎藤の研究上の関心はレコードマネジメントにあったため、ディプロマティクス及びレコードマネジメントと関連性の強い評価選別を扱った 'Structural and Formal Analysis: The Contribution of Diplomatics to Archival Appraisal in the Digital Environment' を取りまとめた報告を担当してもらった[3]。デュランチ先生のこの論考は電子記録を素材としており、ディプロマティクスは電子記録の真正性を担保するレコードキーピングシステムの構築、文書群の構造分析、構造分析による評価選別の円滑化、さらには選別後に残る文書の真正性の担保それぞれに貢献する学術であることが簡潔にまとめられていた。しかし、この簡潔性が逆に災いし、勉強会参加者はこの論考を完全に理解することができなかった。インターパレスプロジェクトのWebサイト[4]にアップされている、詳細な成果報告を読まなければ、ディプロマティクスの電子記録及びそれに関するシステムへの応用については把握できないという半ば自明の事実を参加者は自覚した。

第3回目は5月26日に開かれ、報告者は松尾であった。松尾報告の主題は「デュランチ先生とインターパレス」であり、デュランチ先生主催の国際的な電子記録保存プロジェクトであるインターパレスプロジェクト及びそこで得られた成果のあらましについて述べられた。この報告では、先に述べたように、ディプロマティクスの真正性担保の機能、具体的には電子記録への応用についても言及された。参考文献は*Encyclopedia of Library and Information Sciences*, 3rd edition所収の 'InterPARES' である[5]。松尾はまた、デュランチ先生とケネス・ティボドー氏の論考を参照し、今日の電子環境におけるドキュメントの在り方が、ヨーロッパ中世における公証人文書の管理の在り方とアナロジカルな関係にあるという議論も紹介した[6]。

第4回目は青木祐一・本専攻助教による報告であり、6月2日に開かれた。日本近世史を専門とする青木助教は、日本史についてあまり知識がない者もいる勉強会参加者にむけて、日本の古文書学について講義に近い報告を行った。その中で、日本では古文書学はほぼ中世の記録の分析に留まり、近代はおろか近世にも種々の問題がありあまり適応されていないという点が論議の焦点となった。また、欧米ではディプロマティクスは電子文書にまで応用されているが、日本とのこの違いは何なのか、そしてそうなった理由は何故なのかについても議論は及んだ。

以上が、Dチーム主催の勉強会の概要である。この勉強会自体は終了したが、これを引き継ぐ形で、デュランチ先生帰国後、Dチームにいた平野と橋本を中心としてサブゼミを開催している。これは主に英語を中心とした海外文献を読む研究会である。サブゼミは、デュランチ先生をはじめとする世界の碩学たちの知識を貪欲に取りいれる場として継続させていく。

3 —— 問題点・今後の課題（松尾美里）

Dチームおよび学生にとっては、こうしたイベントの運営に多少なりとも関わったということ自体が、一つの学びの機会であったということができる。今回の招聘イベントを通じて、学生

らは各人なりに学び、感じ、会得したところがあったに違いない。そうした個人視点からの感想や反省をつぶさにレビューするならば、学習機会としてのイベント運営をめぐる興味深い知見を得ることも可能であるかもしれない。しかしながら、本報告のまとめにあたる本章では、個別の感想や成果を吟味・検証していくことよりも、本専攻全体で共有すべきであるような、大きな課題を概括的に示すことに努め、以てDチームから本専攻全体にむけての問題提起としたい。

3-1：コスト問題

［3-1-1：金銭的コストと時間的コスト］

前述したとおり、Dチームおよび学生は、ゲスト外出時の付き添いや不測事態に備えた待機等の役割（以下、アテンドという。）を分担した。このアテンドの任は、当然のことながら相応の金銭的コストと時間的コストを伴うものであったわけだが、Dチームでは、こうした諸コストをどう処理するべきかという問題について、事前の検討を行っていなかった。実際のところ、金銭的コストに関していえば、イベント終盤にさしかかるまで、空港出迎えのための旅費等一部の例外を除いては看過されており、分担者各人の「貢献」ないし「協力」のうちに委されてしまっていた。金銭的コストについては、のちに先生方のご好意によって個別に補償されたケースもあったが、それも全部ではない。

一般的に言っても、フルタイムの学生にとっての金銭的出費、社会人学生にとっての時間の捻出は、軽く片の付けられるような問題ではない。しかしながらDチームでは、こうしたコスト問題に関する配慮を欠いていた。

［3-1-2：アンケートについての反省］

デュランチ先生帰国前の歓送会の段階にいたって、Dチームでは上記の問題を反省し、学生のアテンドにかかった諸コストを洗い出すためのアンケートを試みた。これは、各人がアテンドや勉強会等をはじめとするイベント関連活動に費やした（1）金銭的コスト、（2）時間的コスト、（3）感想等という、3点を問うだけのごくシンプルなもので、回答方式も字数制限のない自由記述型であった。歓送会およびMLを利用して配布したが、自由記述型の回答方式が逆に回答しづらかったのか、回収率は低く、また、コストの計上の仕方も回答者によってばらつきが生じた。その結果、惜しいことにイベント全体の総括あるいは問題の議論の参考となるような情報を導き出すことはできなかった。

今回のアンケートが成功しなかったのは、アンケートの作成の仕方のうちに原因があり、回答側の問題ではない。このようなアンケートを行うにあたっては、すくなくとも、（1）費目等項目を定義したうえで、計上の仕方を具体的に指示する、（2）被験者にはアンケートの回答に必要な情報の記録化に努めてもらうよう予め周知しておく、という程度のことはしておく必要があったといえる。しかしながら、後手に回ったすえの急ごしらえであったこともあり、残念ながら意図した目的は達成し得なかった。

［3-1-3：コスト問題に関する提言］

金銭的コストに関して言えば、個人の「貢献」として片付けられる範囲にも、先生方の「好意」に頼ることのできる範囲にも、当然ながら限界が存在する。また、金銭的・時間的両コストは、日毎のプランによって大きく差が生じるものであり、分担者間の負担は、当然のことながら公平にはならない。いずれも当然の事ではあるが、これを改めて専攻全体の問題として捉え直してみてはどうだろうか。アテンドにかかる金銭的コストを不安定でインフォーマルなソースに依存することの是非について、専攻全体で一度議論を持つ必要がないだろうか。コストは、アテンドの質に直結し得る問題である。遠路やってきた大事なゲストに、心を尽くして接遇したいと思うならば、等閑にすることのできない問題であることは間違いない。

3-2：リスク管理

［3-2-1：非常・緊急事態への対応体制］

アテンドの計画は、Dチームによって組まれたものであったわけだが、その実態は対応者のシフト表であった。結局、事前ミーティングにおいては、病気・怪我、事故、災害等の非常・緊急事態が生じた際の行動指針等について検討がなされることはなかった。緊急時の連絡先一覧の準備すらなかった点は大いに反省すべきところであるだろう。トラブルが発生した場合、事態が無用に混乱・悪化してしまうおそれがあった。今回は、ほぼ恙なく全日程を終えることができ（台風に見舞われた日があったが）、こうした不用意によって実際に問題が起こることはなかった。しかし、同じような幸運に次年度以降も預かれるときまっているわけではない。多少不運なことが起こったとしても、その影響を最小限に抑え、ゲストの安全な滞在を支援できるよう、専攻全体で非常・緊急事態への対応体制について検討を行う必要があるだろう。

［3-2-2：責任範囲の整理］

今回は、講義等の大学における正規の活動・行事以外の場面に、様々な形で学生が関与したわけだが、そうした諸事のなかには、学生が本来は立ち入るべきでないような事務的手続き、機密事項、私事に立ち入りすぎる事柄が含まれていた可能性を否定することはできない。Dチームも専攻も「臨機応変」を旨として動いており、誰が何をどこまで受け持つのかというところを細かく計画していたわけではなかった。目の前のことについて、できる人が可能な範囲の対応をしていくなかで、学生がその身分では関わるべきでない手続きや情報に接する場面が、全く皆無であったとは言いきれないだろう。これは、一面においては情報セキュリティに関する問題である。手違い等の問題・事故がいざ起こった場合に、その影響を最小限にとどめるためには、学生が関われる範囲というのに予め線引きがあった方がよいはずである。

臨機応変の対応ができるのは、様々なバックグランドを持つ学生が集っている本専攻の美点の一つである。この臨機応変の力が、責任問題をこじれさせるリスクに転じるようなことがないよう、招聘イベントに関わるタスクについて、その責任範囲を整理する必要があるのではないだろうか。

3-3：記録化

前段で述べたように、招聘イベントそのものに学生全体が関わったのは、今回が初めてのことであり、こうした経験をどのような形で記録化し継承していくかという点について、予め何らかの方針等が立てられていたわけではなかった。いくつか案が出されてもいたが、残念ながら、それについて検討する時間も余裕もなかった。その結果、イベントの報告・総括に取り組もうにも、材料となるべき記録が、Dチームおよび学生間で交わされたWebメールによる通信記録のみ、という頼りない状態になってしまってさえいた。そのため本報告は、まず平野が、大量のメールから学生活動の全体像を把握できるタイムライン記録の再構築を行い、Dチーム内でイベントの全体像を共有するということから始められている。

本専攻関係者にとって海外ゲストの招聘イベントは、その一回一回が掛け替えのない、貴重な出来事である。今年の学生にとって、ルチアナ・デュランチ先生との出会いは、2012年に本専攻に居合わせたからこそ浴し得た幸運であった。もちろん、別の年にはその年なりの「幸運」がある。こうした招聘イベント自体は、「その時」に居合わせなければ共有できない経験であるわけだが、それを記録化すれば、のちの学生もその経験を間接的にではあるが共有し、恩恵を受けることが可能になる。「コスト問題」と「リスク管理」に加え、この「記録化」も本専攻全体で共有すべき検討課題のひとつとして最後に挙げておきたい。「記録化」が、前の二者と同じくらいに難しく、また重要な問題であることは、本専攻の関係者には改めて説くまでもないことだろう。

1 —— Luciana Duranti,'Diplomatics: New Uses for an Old Science,' Part I-VI, *Archivaria* 28-33（1989-1992）. のち、これらをまとめた*Diplomatics: New Uses for an Old Science,* Lanham: Scarecrow Press, Inc., 1998が刊行される。

2 —— Heather Macneil, *Trusting Records: Legal, Historical, and Diplomatic Perspectives,* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 2000

3 —— Luciana Duranti, 'Structural and Formal Analysis: The Contribution of Diplomatics to Archival Appraisal in the Digital Environment,' *The Future of Archives and Recordkeeping,* Jennie Hill（ed.）, London: Facet Publishing, 2011, pp.65-88.

4 —— The InterPARES Project, "The InterPARES Project," The InterPARES Project, http://www.interpares.org/（2012-11-10アクセス）.

5 —— Luciana Duranti, 'InterPARES,' *Encyclopedia of Library and Information Sciences,* 3rd edition, Taylor & Francis, 2009

6 —— Luciana Duranti and Kenneth Thibodeau, 'The Concept of Record in Interactive, Experiential and Dynamic Environments: the View of InterPARES,' *Archival Science 6*, Issue 1, 2006, pp.13-68. 特に電子環境におけるドキュメントとヨーロッパ中世における公証人文書の管理の在り方のアナロジーについてはpp.52-60.を参照。